

子どもの人間関係を通じた遊びとかかわり

—観察法による実践事例—

田 中 るみこ

Play and Relation through the Human Relations of the Child — Practice Example by the Observation Method —

Rumiko Tanaka

(2017年11月22日受理)

1 はじめに

本研究は子どもの人間関係を通じた「遊び」と「かかわり」に着目し、観察法による子どもの活動の実践事例について明らかにするものである。

近年、子育てに関わる地域や家庭の状況も変化し、核家族化や地域のつながりの希薄化から、日々の子育てに対する助言、支援や協力を得ることが困難な社会状況である。その状況の中でどのような姿勢で子どもにかかわるのか、子どもの育ちだけでなく、育てる側の保護者の養育の発達にも危機をもたらしている。

近年の子どもの人間関係について先行研究では、入江(2008)は子どもの人間関係のかかわりは「他者との関係性を質的に変容させていく機会になる」と述べており、池田(1991)は「子どもの自主性に基づく遊びを丁寧を支えた保育実践から、子どもが「人とかかわる力」を身に付けるために、保育者が子どもとの信頼関係を作り、子どもが充実した遊びを展開し、十分に満足するまで遊ぶことができる環境を作ることの必要性がある」と挙げている。

本研究においても、子どもを取り巻く友達、兄弟、保護者、保育者などの人間関係を築く上で、遊びを通して、他者とかかわりを検証することで、さらに豊かな人間関係が獲得できるのではないかという経緯に至った。人間関係の育ちにかかわる課題は、子どもたちが集団の中で自己を発揮しながら友達や保育者、保護者が相互にかかわり合う関係を形成することが求められる。

そこで、本研究ではC大学の公開講座において、親子を対象とした「表現遊び」を通して、子どもの人間関係を通じた遊びとかかわりについて検討し、観察法による実践事例について報告する。また本研究の実践は平成

27年度に引き続き2年目の実施である。吉川(2017)は親子で「表現遊び」を実施することで、日常生活と離れた場所で、保護者は子どもと一緒に遊び、かかわりをもつことで、子どもに対する不安やイライラが緩和された結果を得た。本研究においても、子どもに対する保護者の声掛けやかかわりについて事例を挙げて検討する。

2 保育における子どもの人間関係

2-1 本研究の子どもの人間関係の視点

幼稚園教育要領や保育所保育指針の保育内容「人間関係」は、他の人々と親しみ、支え合って生活するために、自立心を育て、人とかかわる力を養うことと明記している。ねらいについては、(1)幼稚園(保育園)に親しみ、自分の力で行動することの充実感を味わう、(2)身近な人と親しみ、かかわりを深め、愛情や信頼感をもつ、(3)社会生活における望ましい習慣や態度を身に付けることである。ねらいを達成するための指導事項は、13項目の内容を示しており、子ども一人一人が発達に即して、自分が保護者や周囲の人々に温かく見守られているという安心感から、人に対する信頼感をもつことで自身自身の生活を確立していくことが培われると示されている。また、幼児期にふさわしい必要な体験を得られる中で、自らの問題として取り組み、望ましい方向に向かって活動を展開していくこと、子どもが成功、失敗、自信、感動、葛藤などを通して互いに理解し、地域との体験を重ねながら、かかわりを深め、共感や思いやりなどをもち、人とかかわる力を育てることになると示されている。学校教育法第22条では、「幼稚園は、義務教育及びその後の教育の基礎を培うものとして、幼児を保育し、幼児の健やかな成長のために適当な環境を与えて、

その心身の発達を助長することを目的とする」と明記されており、子どもを取り巻く身近な社会や自然環境などとかかわる生活を安定した情緒の下で、人とかかわることの楽しさや大切さを知り、身近な人へ信頼感を深め自主性や自立、協同、規範意識などを養うよう配慮が必要である。そして、保育者や保護者は子どもの行動や性格、基本的な生活習慣や態度（社会性）育成に働きかけて、その体験や学習の中から人とかかわる力の基礎を身につけることが大切である。そのため、「人間関係」は、人間形成そのものに密接な関係をもつ、幼児教育の基礎となる領域であるといえる。

2-2 子どもの育ちにおける「遊び」と「かかわり」の重要性

寺見（2003年）は、「子どもの生きる力と自我の育ちには、人とかかわりが重要な役割を果たす。しかしながら、今日の子どもたちは、少子化のために地域の仲間やきょうだいも少なく、人とかかわりの希薄な中で育っている」と述べており、核家族が多い中、幼稚園や保育園に来て、初めて友達や保育者、他の大人に出会う子どもも少なくない。こうした現状から、幼稚園や保育園、地域の活動で、子どもが様々な人間関係を築き、社会性を経験することは、教育的な意義を持つと言える。また、子どもは遊びの中で同年齢の子どもとかかわりだけでなく、異年齢の子どもとかかわりも経験できることは、子どもの発達や社会性において、重要な役割をもつと言える。幼稚園教育要領の3内容の取扱いでは、(3)幼児がお互いにかかわりを深め、共同して遊ぶようになるため、自ら行動する力を育てるようになるとともに、他の幼児と試行錯誤しながら活動を展開する楽しさや共通の目的が実現する喜びを味わうことができるようにすること、と明記されており、子どもの育ちは「遊び」の中で、「ひと」との「かかわり」をもつことで、自分の気持ちや思いを表現し、子どもの中で「自分」というものが確立されていくことが予想される。このことから、子どもの育ちには「遊び」と「かかわり」は欠かせないものである。

2-3 個から集団の関係を育てる

子どもは生活や遊びの中で、「やりとり」のコミュニケーションによって、周囲との「かかわり」をつくりながら、自己を発達させる。「遊び」の中で、子ども、友達、保護者、保育者が様々な「やりとり」を展開し、生活体験と感情体験を行うことは子どもの人としての育ちの過程をつくることと言えよう。幼稚園教育要領の3内容の取扱い（(2), (5)抜粋）では、「(2)幼児の主体的な活動は、他の幼児とかかわりの中で深まり、豊かになる

ものであり、幼児は其中で互いに必要な存在であることを認識するようになることを踏まえ、一人一人を生かした集団を形成しながら人とかかわる力を育てていくようにすること。特に集団の中で、幼児が自己を発揮し、教師や他の幼児に認められる体験をし、自信をもって行動すること」、「(5)集団を通して、幼児が人とかかわりを深め、規範意識の芽生えが培われることを考慮し、幼児が教師との信頼関係に支えられて自己を発揮する中で、互いに思いを主張し、折り合いをつける体験をし、きまりの必要性などに気づき、自分の気持ちを調整する力が育つようにすること」と明記されている。

寺見（2003年）は、「個と集団の関係を考えるとき、子どもの内的な育ちの過程として捉えることは、「かかわり」から「やりとり」が生まれ、「かかわり合い」となって個々の関係ができ、集団となっていく」と述べている。この人間関係形成の中に個々の子どもの育ちがあり、保育の中の個と集団の関係を見据え、その過程を丁寧に作り上げていくことが一人一人を生かす集団づくりと言えよう。そこから、個のつながりに力動関係や役割関係が生まれ、結束力や達成力、生産力などの集団の力や枠組みが生まれて集団が形成されていく。個と個のかかわりが集団をつくり、さらに豊かなものにしていくように幼稚園や保育園、地域の活動における人間関係づくりが必要である。

2-4 かかわりにおける基本パターン

子どもの様々なかかわり方のパターンは、保育活動において子どもたちの性格やかかわり方の傾向がどのように展開しているか、保育者や周りの大人たちは理解する必要がある。そのためには、日々の保育活動において、保育者自身も子どもたちと共にかかわり方の多様性を育てていくことが求められる。他者とかかわり方には、内接的、内在的、外接的、外在的、接在的なかかわりのパターンがあり、子どもがどのかかわり方を実践できるかは、個人の性格や行動パターンの傾向を見極める必要がある。かかわり方によっては、集団内の他者の特性が生かされ、集団全体の発展を促進することになる。こうした経験を積み重ねていくうちに、子どもたちは他者と一緒に遊ぶことに楽しみを見出して、集団生活を充実させ、更なる子どもの発達を促進させていくと言えよう。

佐伯（2010）は、子どもの発達について、以下のとおり、述べている。

発達を自分が成長し、発展し、育っていくべき自分自身—これからなりたい『もっと本当の自分』を探し求める“自分探しの旅”として位置付けることを提案する。そして、その過程は、保育者や友達などの親しい他

者との交流によって支えられている。―（中略）―本当の YOU 的かかわりというのは、もう一つの「外の世界」（THEY）と対峙していく。つまり第二接面での交流を行き先として常に意識し、見つめながらお互いが安心して打ち解けるのが理想である。つまり、みんなが「お互い」を見つめあうのではなく、「外」をともに見つめるという関係で、はじめて本来の YOU 的世界が作りだせるのだ。以下、省略。

このことは、人が世界とかかわりを作り出すときには、まずその人の自己（I）に共感的にかかわる他者（YOU）とのかかわりが必要であることを示している。佐伯（2010）が図1に示す通り、かかわりの世界を経て、より広い社会的な世界（THEY）に子どもの活動が広がっていくものである。

主体である子ども（I）が幼稚園や保育園などの社会（THEY 世界）に参加し、自己を発揮していくためには、ありのままにかかわってくれる他者（YOU）との交流がもてることが必要である。また、子どもは他者との関係を基盤にして、より広い世界に参加し、その世界の広がりの中で、友達同士や集団となる仲間と出会っていくのではないかと予測する。

本研究の「遊び」においても、ありのままにかかわってくれる他者と一緒にかかわりながら、自分自身が「遊び」を十分に楽しみ、集団で遊ぶことで活動の世界が広がっていくと想定した。本研究は、全3回隔週（2週間ごと）において、子ども同士や親子の活動する場を提供し、「遊び」と「かかわり」を観察法によって、実践事例の検討を行う。

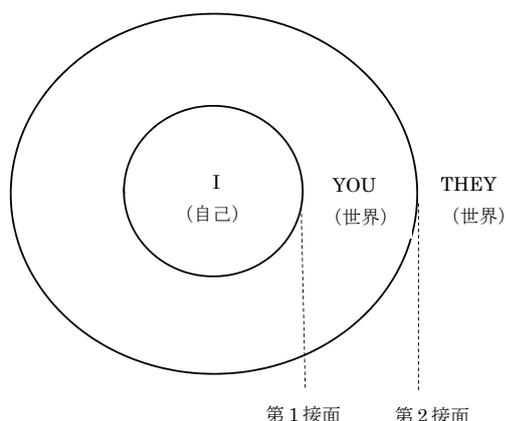


図1 学びのドーナツ（佐伯 2010）

3 研究の目的と方法

本研究は、平成28年度にC大学において実施された公開講座『親子で楽しむ「表現遊び」』の2年目の実践

である。この公開講座を通して、親子で「遊び」を楽しむことにより、子どもの表現を豊かにするだけでなく、子どもにとって一番身近な他者である保護者が子どもと一緒に遊ぶ時間を共有した。また、保護者自身が子どもの発達や子育てなどを学ぶ場として、親講座を設けた。親講座（全3回）では、子どもの「遊び」についての基礎的な知識やかかわり方、子どもの発達や気になることなどを学ぶ機会を設定した。このことは、親自身の子育てを見直し、子どものよりよい育ちの変化につながると仮定した。

3-1 実践概要

実施日：平成28年6月26日、7月10日、7月24日（全3回）

時間：10時～13時（3時間）

参加者：8組の親子 計18名

大人8名（母親8名）、子ども10名（兄弟児含む）

ねらい：親子で一緒に音楽、造形、言葉、身体などのさまざまな要素を取り入れた「表現遊び」を体験し、それらを通して表現について楽しむことを目的とした。また、身体を大きく使うという行為に焦点を置き、身体全体を使って思いきり描くことやつくることの楽しさを感じるようにした。講座終了後には、親を対象とした親講座（30分）を実施した。

内容：

【第1回目】音楽的な遊び（リトミック）、造形的な遊び（大きな折り紙で遊ぶ）

【第2回目】粉粘土を用いた感覚遊び・造形的な遊び（どべを使用したお絵描き）

【第3回目】身体的な遊び（まねっこ）、造形的な遊び（身体を用いたお絵描き）、自然採集、造形的な遊び（スタンプング）、ブラックライトでの鑑賞

記録：ビデオ、写真撮影から個と集団を観察法によって分析した。また、学生のエピソード記録も分析の参考にした。

4 子どもの「遊び」と「かかわり」について

本項目では、子どもの「遊び」と「かかわり」について実践事例を報告する。子どもの遊びはC大学において8組の親子を対象とした公開講座で実践されたものである。その遊びの中から、子ども同士、保護者、スタッフの事例を取り挙げる。

4-1 実践事例①

対象：男児A 2歳6カ月、保護者A（母親）30代（妊娠中）

A児は筆を使って絵を描く遊びをやめる時間になっても、なかなか遊びをやめなかった。保護者Aが「A、もう遊びをやめなさい」、「片付けなさい」、「筆を置いて手洗いしなさい」と言っても、A児は保護者Aに背を向けて遊びをやめない。見かねたスタッフが「じゃあ、その筆も一緒に持って手洗いに行こう」と声をかけると、素直に従った。

A児は、第1回目は落ち着きがなく、部屋を1人で走り回っていたが、回を増すごとに、周りの子どもがどうしているのかを見て、絵本に集中したり、スタッフの声掛けにも素直に聞き、保護者Aや周りの友達と協同して遊ぶようになった。ここでは、保護者Aが子どもに「早く行動を促したい」という気持ちがあり、子どもは保護者Aの言葉を指示的な言葉と受け止めた可能性がある。しかし、この保護者Aの声掛けは一般的な家庭でもよく使う言葉ではないだろうか。また、保護者Aは妊娠中であることから、A児は赤ちゃん返りをしていた可能性も考えられる。仮説として、①「遊び」（筆描き）に熱中しており、やめたくなかった、②保護者Aの言葉に反発し、「かわり」に素直に応じなかった、③①と②の両方の理由などが挙げられる。いずれにせよ保護者や保育者は、日頃からA児の気持ちに寄り添うことで、子どもの行動に結びつけることを意識していく必要がある。

4-2 実践事例②

対象：男児B 4歳8カ月、保護者B（母親）40代

B児はお絵描きの前にビニール手袋を手にはめていた。A児は（B児の様子を見ながら）「なんしょと？」と聞く、B児はビニール手袋に絵具をつけながら「これ」とA児の方を向かず回答、A児もB児を見なが

ら、同じようにビニール手袋に絵具をつけて、紙に手形を押す。B児は赤色の絵具と青色の絵具が手の中で混ざり、色が紫色になって驚いた表情をした。A児はその様子を見て、他の色がどうなるのかを試していたが、色が混ざりすぎて茶色になってしまった。B児は紙に両手で茶色の絵具を塗り付けながら、絵具の感触も楽しむ様子であった。B児はしばらく色遊びをしていたが、他色が混ざりすぎてしまい、同じく茶色になった。A児はB児の方を見ながら、B児と同じ行動（四つん這いになり、大きな紙に両手で勢よく塗りつける）を行った。B児はA児が同様の行動をしているのを見て、「おー」と歓声をあげて喜び、笑顔で一緒に遊び始めた。

B児は、保護者Bの3人目の子どもであり、他の兄弟と10歳以上年齢が離れている。そのため、家庭で兄弟が遊ぶ内容が異なっており、1人で遊ぶことが多い。保護者Bは、日中は仕事をしているため、B児と遊ぶ時間が少ないことを気にしていた。今回、他の兄弟たちと離れ、保護者BとB児の2人だけの時間を楽しみ、アート遊びを満喫するために参加した。B児は日ごろからアート教室に通っており、ものをつくるのが好きである。第1回目は他の子どもたちと共同せず、保護者Bと一緒にものを作り出していた。第2回目・第3回目では、B児は保護者Bから離れて、A児と一緒に作品をつくり、作品を通して会話し、笑顔で走り回っていた。A児とB児は言葉のやり取りは少ないものの、感覚的に相手の行動を察知しつつ、自然なやり取りの「遊び」と「かわり」を行っているようであった。また、今回の活動では、他の活動においても異年齢の子どもたちの集団のため、月齢が低い子どもが月齢の高い子どものまねをすることがよく見られた。

B児が赤色と青色を手で混ぜ合わせて、紫色に色が変化したことは、子どもたちにとって、大きな発見や刺激になったと推測される。A児もB児の行動のまねを行



図2 身体を大きく使いながら、大きな折り紙を折る



図3 色々な折り紙をちぎって貼る

い、いろいろな色を混ぜて遊ぶことを行った。その後、二人共に色が混ざりすぎてしまい、茶色に変化していき、次に大きな紙に色を塗りつけることに遊びが変化していった。また、「遊び」や「かかわり」から二人で同じ行動をすることの楽しさも感じ取ったと考えられる。この感情の共有体験が子どもたちお互いに相手の気持ちを気づききっかけになり、相手を思いやる気持ちにつながっていくのではないだろうか。このことから、相手にも感情があることに気づき、友達が行っていることに興味を持ち、自分に映しこんで遊び、使っている物を貸したり、受け取ったりすることができるようになり、友達の関係ができるようになると考えられる。

4-3 実践事例③

対象：女児C 4歳10カ月、保護者C（母親）30代
保護者C「先生、Cはお友達とうまくやれているでしょうか」

スタッフ「ええ、よくやれていますよ。泥粘土で遊ぶことに熱中しているみたいですね」

保護者C「こんなにじっくり遊んでいるところを見るのは初めてかもしれません」

スタッフ「日頃は一緒に遊ぶことはありますか？」

保護者C「子どもが何かしていると、先になにかやってしまうか、口を出すかのどちらかになってしまいます。いつもイライラしてしまいます」

C児は第1回目はスタッフの言うことをよく聞く、しっ

かり者の様子であったが、第2回目からは保護者Cから離れてスタッフに甘える様子がみられた。第1回目では、C児は大きな折り紙で兜を折り、兜から魚ができ、魚の装飾をしていく際、のびのびと描いていた。保護者Cが「魚のひれはこの色がいいんじゃない?」、「こう描いたら魚らしくなるよ」と声掛けをしたら小さく描いていた。第2回目、第3回目はスタッフや他の友達と遊ぶ様子が見られ、保護者CはC児と一緒にいるものの、C児の活動を観察する姿が多く見られた。親子で活動する時、親は子どもの補助的な役割を行うことが多く見られるが、事例③の場合、保護者が子どもの活動にアドバイスを行っていたことが見受けられる。しかし、時に大人のアドバイスは子どもの活動や表現の幅を狭めてしまう場合があり、事例③も同じく子どもの活動に制限が見られた。どの保育現場においても、子どもにかかわる際の言葉掛けには細心の注意が必要であり、子どもは自分の思いを受け入れてもらうことで安心し、安定していくものと考えられる。

また、保護者の認識として、言葉掛けが子どもの活動に制限や指示になってしまうことに深い考えがなかったかもしれない。しかしながら、保護者Cは「子どもが何かしていると、先になにかやってしまうか、口を出すかのどちらかになってしまいます。いつもイライラしてしまいます」との発言から、子どもの行動を待たずにイライラしてしまい、先に何かを手伝ってしまったたり、口を出すことを認識している。この場合、スタッフや保育者は保護者の子育ての悩みを聞く時間を持ち、子どもの「遊び」や「かかわり」に関する声掛けなどについて、保護者へ助言や支援の機会を持っていくことが大切である。本研究においては、毎活動後に親講座（30分）を開催した。「イライラする」などの保護者の感情コントロール法など、子育ての解決法を親講座の中で習得する機会を設けた。



図4 みんなでフープのトンネルをくぐる



図5 身体を使って泥絵の具で大きな紙に描く

6 まとめと今後の課題

本研究ではC大学の公開講座において、親子を対象とした遊びを通して、子どもの人間関係を通じた「遊び」と「かかわり」について検討し、観察法による実践事例について報告し、検討してきた。

少子化の現在、家庭で兄弟も少ない中、大勢の子どもたちと過ごす機会は子どもにとって有意義な時間である。本研究の公開講座においても、異年齢の子どもや大人との「遊び」や「かかわり」を通して、人間関係を育むことは、子どもの成長を促す一経験となったと考えられる。また、日常から子どもに関わる機会の多い保育者においても、保育の中で様々な「かかわり」をもつことで、人間関係を築く基となるように、スタッフ間でふり返りや反省会を持つ場を設けた。先行研究(成田2000)の研究においても、「子どもの人間関係のための「人とかかわる力」は日々の保育を振り返り、子どものかかわり方の反省・学習を通じた保育者の変化・成長が子どもの「人とかかわる力」を発達させていく過程が重要である」と述べている。

本研究の事例で、子ども同士や親子、スタッフとの「遊び」を通じた「かかわり」の中から、子どもの言葉の受けとめ方や子ども同士の遊び、保護者の子育てなど、人間関係形成の上で、成功や失敗などを通して人とかかわる力を育てる機会となった。今後も子どもの「遊び」や「かかわり」について、子どもの人間関係の理解とねらい達成に寄与し貢献していきたい。

今後の課題として、活動を継続していくために、就学前の子どもへの参加人数を増員し、年齢別のデータの蓄積を行い、活動の幅を広げていくことが挙げられる。また、親子や子ども同士の活動の広がり进行分析するためにも、反省会や振り返りを十分にを行い、客観的な効果の検証とともに詳細なアンケート作成やインタビュー調査な

どを行っていききたい。更に、地域で子育ての支援の場となるよう、保護者の養育を促す機会として実施していきたい。

【倫理的配慮】

本研究のアンケート調査や記録等については、筑紫女学園大学の「人を対象とする研究倫理審査」を受け、受理されている。

【謝辞】

本研究に協力いただいた、公開講座に参加頂いた子どもたち、保護者の方、並びに香川大学吉川暢子先生に感謝申し上げます。

【引用・参考文献】

- 幼稚園教育要領解説, 文部科学省, 2009
 学校教育法, 文部科学省, http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/026/siryo/07072701/002/001.htm
 入江慶太: 保育者の遊び揭示による年中卒の人間関係の質的変容, 幼年教育研究年報, 第30巻, P69-76, 2008
 池田理映・實松瑞栄・村田陽子・志熊淑子・大森陽子: 幼稚園における幼児の人間関係に関する研究(2)―人とかかわる力を育てる援助―日本保育学会第44会大会発表論文集, P574-575, 1991
 吉川暢子: 親子での表現遊びに関する意識の影響―事前事後のアンケート調査から―美術教育学研究, 第49号, 2017
 寺見陽子編著: こころを育てる人間関係, 保育出版社, P29, 2003
 永野泉: 保育内容「人間関係」に関する研究の動向, 一保育学会の研究発表を中心に―淑徳短期大学研究紀要, 第46号, P33-42, 2007
 佐伯胖: 『「学ぶ」ということの意味』, 岩波書店, P66, P72, 2010
 成田朋子: 事例研究: 幼児の人とかかわる力を育む, 保育学研究, 38(1), P61-68, 2000



図6 黒画用紙に蛍光チョークで描く